一中国文学者からのコメント

千　野　拓　政

Comment by a Scholar of Chinese Literature

Takumasa SENNO

シンポジウムにご参加いただいているみなさま。人文学の再検討と再構築を目指すわたしたちの研究の幕開けに相応しいシンポジウムを開催していただき、心より感謝いたします。残念ながら本日は別の学会と重なっており、シンポジウムに参加できず申し訳ありません。つきましては、紙面にて簡単にコメントをお届けし、シンポジウムへのオマージュとさせていただきたいと思います。

1．≪人文学≫の本質と、いま求められていること

安酸敏眞先生の『現在、あらためて《人文学》を問う』、武藤秀太郎先生の『日中両国における人文学の概念形成――「整理国故」と「封建」を中心に』を拝読して、共感したり、考えさせられたりする点がいろいろありました。

まず、安酸先生のご報告で、《人文学》の本質が、注釈と、その注釈に対する注釈にあるという点は、中国文学も同じで、洋の東西を問わないことを再確認しました。中国学では、原典に対する「注」と、その注釈である「疏」を付けること、それを読み解くことが伝統的に学問の中心とされてきました。それは、まさに他者の認識を認識することにほかなりません。こうした世界的な符合は、《人文学》の原点が、地道に原典を読み解き、粘り強く自らの思考を重ねること、そのために他者の声に謙虚に耳をかたむけることにあるのを物語っているでしょう。

そうした原点を確認することは、現在の学問の風潮への再考をも促します。

先日、いろいろな学問の領域において、英語で研究しなければ世界で通用しなくなっている、例えばイタリア語が中心だった美術史でも英語が重要になっている、という意見を耳にしました。その言葉に、わたしはある種の違和感を払拭できませんでした。よく考えてみれば、それは英語の論文が圧倒的に増えてそれを読むことが求められ、自身も英語で研究を発表しないと多くの人に読んでもらえない状況になっているということなのだと思います。少なくとも、イタリア語で原典を読み、解釈する必要性がなくなった訳ではないはずです。だとすれば、美術史の研究では、イタリア語も英語もできないといけない時代になりつつある、という方が正確でしょう。

2014 年 11 月 26 日付け朝日新聞のインタビューで、ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英さんが次のようなことを語っておられました。中国や韓国に行くと、当地の研究者が、日本ではノーベル賞受賞者がたくさん出るのに、自国ではどうして出ないのか真剣に議論していたが、その結論として出てきたのは、日本では日本語で最先端のレベルまで研究できるのが大きいのではないかということだった、というのです。自国語で最先端のレベルを学べないのなら外国語で学ぶしかありませんが、それが研究や教育の進展を束縛してきたのではないか、という意見です。かれの見方は、日本の教育の歴史とも符合しています。明治・大正期の大学は、洋行して戻ってきた研究者が、日本語で最先端の学問を学生に普

及し、そこまで研究ができるようにすることを目指してきました。日本の学問はそうして発展してきたわけです。

科学ジャーナリストでネイチャー・ダイジェストの実質的な編集長だった松尾義之さんの『日本語の科学が世界を変える』（筑摩選書、2014 年）でも、益川さんの意見と同じように、近年ノーベル賞受賞者を量産する日本の科学研究に世界が注目し、自国語（すなわち他者の言葉ではない自らの言葉）で学問を究めていくことが改めて評価されているということを知りました。

つまり、《人文学》のみならず《自然科学》でも、潮流にのって英語で学問をし、書くことより、自ら現物に触れ、自らの言葉で地道に持続して思考を深めていくことが重要だということでしょうか。そして今日では、それに加えて、世界に広がる他者の認識を認識するために、外国語の力が求められるということでしょうか。研究者の負担は増えるばかりですが、今日、あり得べき《人文学》の姿を考えるなら、これら二つ要素を克服することが避けられないということなのかもしれません。《人文学》の本質をめぐる議論はそんなことを考えさせてくれます。

２.「人文学（フマニタス）」と臨場感

次に、「人文学（フマニタス）」と「人文科学（スキエンティア）」をめぐる議論では、なぜ《人文学》が必要なのかを考えさせられました。思い出したのは、デカルトとヴィーコのことです。

普遍数学に基づき、具体的な場面に囚われない、論理的で普遍的な学問（クリティカ）を目指したデカルトに対し、ヴィーコは修辞学に基づいて、その場の議論に即して展開される学問（トピカ）を目指しました。すなわち、状況に応じて臨機応変な対応を可能にする知を提供しようとする学問です。形式論理で武装された体系的な学問とは異なる、世間知に近いようなものと言った方が分かりやすいかもしれません。いわば、「人文科学（スキエンティア）」と「人文学（フマニタス）」の違いです。

しかし、論理的に導かれる数学の「眞」や、実験の再起性によって導かれる自然科学の「眞」と異なり、人文学の「眞」が蓋然性（真実らしさ）、言い換えればある種の「良識」、「多くの人が納得する共通感覚」にほかならないことを考えれば、ヴィーコの考え方は《人文学》にこそ相応しいと言えるのではないでしょうか。

人はいつも、暗い森の中を彷徨するように、先の見えない現実を進んでゆかねばなりません。事態の全貌を把握できない闇の中で、わたしたちは次から次へと問題に直面し、その都度ぎりぎりの判断を求められます。一つひとつの局面で、自分のいる場に即して考察するほかないのです。――そのとき、わたしたちの足下を照らす松明となり、判断のヒントを与えてくれるものが学問なのだ――わたしには、ヴィーコがそう言っているように聞こえます。外側からではなく、現場に寄り添いながら考えるそのようなものの見方を、わたしは「内部観測」と呼んでいます。暗闇の森の中でものごとを決断するヒントは「内部観測」からしか生まれてきません。

ただ、重要なことは、ヴィーコによって導かれる思考のその先にあります。わたしは、研究はどのようなものであれ「臨場感」が大切だと考えています。どんな遙かな古代のことでも、遠く離れた宇宙のことでも、その研究はどこかで今の自分と繋がっている――そんな感覚が必要だと思うのです。そのことは、一介の日本人であるわたしがなぜ中国の文学や文化を研究するのか、ということとも密接に繋がっています。わたしにとって、人間形成としての「人文学（フマニタス）」はそうした生涯にわたる問題として立ち現れてきます。そして、今日、そうした視座が世界の研究を繋ぐものになり得るのではないか、と思うのです。

学術界でわたしの最も親しい友人は日本人ではありません。一人は上海に、もう一人は香港にいる中国人（華人）です。上海の友人は中国における文化研究（カルチュラルスタディーズ）の泰斗で、「人文精神の危機」を提唱した人物です。近年は、不動産広告の研究などを手がけてきました。1980 年代に誕生した中国の不動産業はその後急速に発展し、建国以来中国最大の工業都市だった上海は、今や中国最大の金融・経済基地に姿を変え、不動産事業の中心地になっています。そこで売られるマンションは、「ローマの庭園」「モンマルトルの丘」など世界の名勝の名が付けられ、「この不動産があなたの夢を叶え、ステイタスを保証する」と、人々の欲望をかき立てます。友人は、不動産広告から、中国の人々の間に広がるそうした新たなイデオロギーを読み解こうとします。彼にとって文化研究は、社会批判の

力が減衰してしまった文学研究に代わって、中国社会を把握・批判し、それを社会に向けて発信する一つの武器なのです。

一方、香港の友人は翻訳研究・香港文化研究の第一人者で、香港のアイデンティテイーについて考えて続けています。翻訳学の発達そのものに、植民地だった香港の歴史が刻印されていることは周知のとおりです。かれの研究に、香港歴史博物館の展示に注目したものがあります。最初に香港の歴史を語ったのはイギリス人でした。かれらはアヘン戦争から香港の歴史を説き起こします。それ以前の、漁村が点在するだけだった香港に触れることは稀でした。1980年代に入ると、大陸の中国人が香港の歴史を語り始めました。かれらは原始時代から説き起こします。香港は中国嶺南文化の一部だという訳です。そうした言説に対し、香港歴史博物館の展示は4億年前の香港から始まります。イギリス人も、中国人も存在しなかった四億年前から香港はあった、というのです。友人はそこに込められた香港人のアイデンティティーを読み解きます。

二人の研究は、自らの暮らす社会で起こっている、抜き差しならない問題を突き詰めて考えるところから出てきたものです。では、日本人のわたしはどうか。なぜ、外国である中国のことを研究するのか。わたしは、日本で起こっている現象とよく似た現象が、中国や香港などアジアの各地でも起こっていることに注目します。（若者のサブカルチャーや、その裏に潜む彼らの閉塞感などが一例です。）わたしたち日本人が直面している問題はアジアのかれらの問題でもある、かれらの問題はわたしたち日本人の問題でもある、と思うからです。「文化の側から見たグローバリゼーションとは、そういう共通性にほかならない。今日の問題を考えるには、内部と外部をともに見つめる視点が必要なのだ」。そういうと二人の友人はいつもニヤニヤ笑います。出発点も方法も異なる三人ですが、自らの暮らす場所で起こっている問題を突き詰めていく過程で互いが繋がっていく実感が、そこにはあります。そんな瞬間に、国や地域を越えて「人文学（フマニタス）」の基盤が形成される可能性を感じるのは、わたしだけの楽観でしょうか。

３．人文学から人文科学へ

上記の議論と相まって、日本と中国で、伝統的な「史（歴史）」が科学的な「史学」へと変貌していく過程を語る武藤秀太郎先生のご報告からは、《人文学》から《人文科学》への変化について考えさせられました。中でも興味深かったのは、朝河貫一との交流から、胡適が科学的な西洋史学の方法に触発されて「国故整理」に向かうくだりです。「井田辯」という論文に朝河貫一が出てくるのはよく知られていることですが、改めて指摘を受けて、いろいろ啓発されることがありました。

ただ、中国文学の研究に携わっている立場からみると、胡適の思考は科学的な歴史研究の主張という文脈に留まらない点があります。「新思潮的意義」を発表し、「国故整理」を主張した1919年、胡適は李大釗・藍公武と、一般に「問題と主義論争」と呼ばれる論戦を展開しています。胡適が『毎週評論』31号（7月20日）に発表した文章「多研究些問題、少談些主義（もっと問題を研究し、主義を語るのは控えよう）」に対して、藍公武が「問題与主義（問題と主義）」（同33号、8月3日）を、李大釗が「再論問題与主義（再び問題と主義について）」（同35号、8月17日）を書いて批判し、再び胡適がそれに対して「三論問題与主義（三たび問題と主義について）」（同36号、8月24日）「四論問題与主義（四たび問題と主義について）」（同37号、8月31日）で反論した論戦のことです。

簡単に言えば、胡適の主張の中心は、中国社会を考察する上で重要なのは、抽象的な「主義」や「学説」を空談することではなく、具体的な問題を一つひとつ研究していくことだ、という点にありました。これに対して李大釗らは、問題と主義は不可分で、ロシア革命など社会の根本的な変革について考えるときには、単に具体的な問題を研究するだけでは十分ではない、と批判したのでした。

胡適はその主張の中で、中国の社会に即して問題を考える必要を述べ、安易に輸入した「主義」を論じることを批判しています。それは、主張の背後に、自らの暮らす社会を考察し、問題を具体的に研究するために、「国故整理」が必要だという認識があったことを示唆しています。胡適の科学的な研究の重視とこうした考えは、当時の新文化運動によってもたらされたパラダイムの転換と密接な関係があります。胡適もその運動の先頭を走っていた一人でした。

パラダイムの転換は、例えば「格物致知」から「科

学と民主」への変化に現れています。中国では伝統的に、科学に相当する概念を「格物致知（物に格(いた)りて知を致(いた)す)」と表現してきました。そのため、物理学ないしは科学も、当初は「格知学」と呼ばれていました。森羅万象を事物に即して正しく究めることで知がもたらされる、という考え方です。ただ、理論的な探求が主で、倫理的な価値観を伴っていました。革新的な思想家だった王陽明は、それを批判して実験主義唱えましたが、かれ自身も、そうして得られた知を「良知」とし、それによって「知行合一」を考えました。「格知」が、一貫して人のあり方と不可分のものとして捉えられていたことが分かります。胡適も重要な執筆者だった『新青年』誌上の有名な言葉を引けば、そうした理念が、新文化運動によって「賽先生（science)」と「徳先生（democracy)」に取って代わられた訳です。（胡適自身も後に「格知与科学（格知と科学)」という文章で、その変化について書いています。[1933年、『胡適遺稿及秘蔵書信第9冊』所収]。）

当時、胡適とともに新文化運動の先頭を走っていた魯迅の弟周作人は「人的文学（人の文学)」(『新青年』5巻6号、1918年12月）のなかで、「人生の諸問題に対して記録研究する文章を人の文学という」と述べています。これは、新文化運動の科学志向が、人間の研究と不可分であることを示しています。つまり、当時のパラダイム転換は、人や社会を捉える力を喪失しつつあった従来の文化や学問に代わって、新たな社会における人間の問題を考えるために必要とされたということです。胡適の科学的歴史研究の主張もその例外ではありません。

このことは、科学として再構築された《人文科学》が、実は新たな時代に即応した人間形成の学、すなわち新たな「人文学（フマニタス)」として要請されたものだったことを示しています。「人文学（フマニタス)」から「人文科学（スキエンティア)」の変化は、それによって何かを喪失したり、獲得したりするといった、単線的な経路でたどれるものではなさそうです。

４．≪人文学≫のアポリア

そう考えると、今日叫ばれている《人文学》の危機も、少し異なった相貌を呈してくるのではないでしょうか。《人文科学》が形成された近代以降も、人間の学として、今日の社会や人を考えようとする研究者は少なくなかったはずです。研究者の多くはそういう思いで真摯に研究に取り組んできたし、現在の研究者もそうしていると思います。しかし、それでも《人文学》が有効性を失いつつあり、危機を迎えているとすれば、それは、中国で新文化運動とともにパラダイムの転換が起こった時代と同様、今日、これまでの《人文学》では捉えきれない事象が世界中で次々に生まれつつあって、誰もがそれを捉える方法を掴みかねているからではないでしょうか。

一つだけ例を挙げましょう。わたしが研究テーマの一つとしているサブカルチャーの分野では、中国の一つのインターネットサイト（文学、ライトノベル、同人、コスプレなどが掲載されています）だけで、一日に7億字の投稿があります。これだけの資料を網羅的に扱うのはとうてい無理なことです。アプローチの方法は、これまでと変わらざるを得ません。

また、若い読者のテクストの読み方は以前と異なっています。簡単に言えば、作者の思想や文体を鑑賞すると同時に、あるいはそれより重要なものとしてキャラクターを鑑賞する若者が増えているのです。それは読者と作品の関係が変化しつつあることを物語っています。どうやら、作品を通じて人間や社会の真実に触れることと共に、あるいはそれ以上に、仲間とコミュニケーションを取ることを求めているらしいのです。さらに、その背景には、彼らのライフスタイルや、社会との関わり、社会観の変容（簡単に言えば疎外感）があって、上記の変化と深く結びついています。

そうした大きな移り変わりをどう捉えるのか。アンケートや、インタビューや、インターネットや、テクスト分析・理論分析など、ありとあらゆる手立てを駆使して、アプローチがなされています。その意味では、テクノロジーの発展・変化は、研究の突破に繋がる無視できない要素です。ただ、それらはいずれも模索の段階というほかありません。かくいうわたしも、目の前の膨大な資料と急激な変化のスピードに絶望しつつ、方法を模索しながら苦闘を続けているというのが実情です。

わたしたちが依拠し、価値観を育んできた、文学や、映画や、音楽や、その他諸々の文化領域を含む近代の文化システムは、その誕生から百数十年が経過しました。おそらく、21世紀を迎えた今、近代

の文化システムが始まって以来の、大きな変化が進行しているのではないかと思います。その渦中にいるわたしたちに全貌は見えません。しかしその端緒や予兆は、すでに誰もが感じ取っているのではないでしょうか。だとすれば、今日の《人文学》の危機の根本は、これまで文化システムの考察に力を発揮してきた《人文学》（あるいは《人文科学》）が、その有効性を失いつつあることにあるのかもしれません。それは、《人文学》の原点に立ち帰るだけでは、わたしたちの研究が今日の世界を捉えられない可能性を示唆しています。

では、新たな文化システムに対応する《人文学》はどのような姿をしているのでしょうか。これまでのシステムの中にいる者に、その姿を描くことは至難の業です。今日の《人文学》のアポリアは、そうしたところにあるのかもしれません。わたしたちは果たしてどこへ行こうとしているのでしょうか。

魯迅は、この世にもともと道はない、歩く人が多くなれば、それが道になるのだ、と言いました。新しい人文学に到る道は、わたしたちが荒野に踏み出した後に、かろうじて生まれてくるのかもしれません。

（文章の一部に、拙著「森を行くものよ、松明をともせ――近代、「光の射さぬ森」の歩き方」（『接続』第5号、ひつじ書房、2005年）と重複する部分があることをお断りしておきます。）